

他者の欲望

—ジャック・ラカンの欲望の理論—

番 場 寛

1 序

人間にとって、自分が確かに人間であると思ひ知らされる時がある。その一つが、何かを欲望している自分を意識する時ではないであろうか。それが物であれ、愛情であれ、地位や名誉であれ、欲しい対象が手に入らない時の焼けつくような胸の痛みを覚えるのは、純粋に生理的な欲求によってのみ、対象を求める動物とは異なる人間が人間である証なのであろう。1988年に話題となった、デパートの宣伝のコピーに「ほしいものが、ほしいわ^①」というものがあった。これは既に言われている様に、欲望の対象の個別性を主張していると同時に、欲望の対象となりうる様な対象が欲しいと言っている様にもとれるコピーであった。また後に本稿で論じるが、人は芥川の『芋粥』の主人公のように、その欲望が満たされようとするその瞬間にそれがすでに求めている対象ではなくなってしまう経験もすることがある。

いずれにせよ、欲望というのは人に普遍的に備わっている性質でありながら、それを感じているのは紛れもなく自分であるという個別性の意識は常につきまとっているのである。

しかし、ラカン (Jacques Lacan) はその「人間の欲望は他者 (L'Autre) の欲望である。」と驚くべきことを言っている。この「他者」は大文字で記されていたため、普通の「他人」という意味ではないとは思われるが、それでいてこの言葉から受ける衝撃の度合が減るわけではない。「欲望」とは紛れもなく主体自らの心の底から自発的に沸き起こってくる心のある状態をそう名づけるというように考えられるからである。その「欲望」が「他者」のそれであるとは一体どういうことなのであろうか。本稿では、ラカン自身は決して明確には説明していない、もしくは明確に説明できなかったその言葉の真

意を探ることを目指す。

2 欲望の三角形

紹介したラカンのテーゼに呼応するかのように、「他者の欲望」ということを理論化し、提示しているのが R. ジラール (René Girard) の『欲望の現象学^②』である。ジラールは、人が持っていると一般に考えてられているような「自分自身による欲望 (désir selon Soi)」に、「他者から借用している」「他者による欲望 (désir selon l'Autre)」を対立させている。しかもその「他者による欲望」はそれと気づかせない程、自分の意志によって行動しているかのように主体を動かすのである。こうした、主体と他者と欲望の対象の三者の関係から成る欲望を「三角形的欲望」と名づける^④。ここで問題となる「他者」とは、例えばドン・キホーテにおいては騎士のモデルとしてのアマディースで表される「欲望の媒体 (médiateur du désir)」である^⑤。それは、小説の中で主人公の「模倣」の対象となるという点で、フローベールやスタンダールやブルーストの作品においても見出されるとジラールは指摘する。例えば、エンマ・ボヴァリーは少女時代にむさぼり読んだ「小説のヒロイン達を通じて」欲望する^⑥。この「欲望の三角形」は基本的な構造は変わることはないにしても、主体とその欲望の「媒体」との距離、関係の強さによって差異が指摘される。ジラールはスタンダールの小説の主人公に見られる「模倣」^⑦「模倣」の形式を「虚栄心」という語で作者が示していると指摘している。主人公は「媒体」となる人物がある対象を欲望していることを知ると、「虚栄心」から今度は自分がその対象を欲望するのである。その場合には時として、その「媒体」となる人物は主体の「手本」であるに留まらず、その主体の欲望を妨げるように見える場合すらあるのである。

こうした「欲望の三角形」においてもし、さきにあげたラカンのテーゼが当てはまるように見えるとしたなら、その場合の「他者」は「他人」と同義語であり、しかも、主体はその「他者」に対し「意識的」であることが指摘できよう。

3 「他人の欲望」から「他者 A (以後本稿では l'Autre をこう表す) の欲望」へ

「他者 A の欲望」を考察するためにまず、幼児期の「欲望」の発生に注目

するドール (Joël Dor) の説明から検討しよう。

幼児の「欲求 (besoin)」による緊張 (例えば「飢え」) が身体に現れても、他者がそれを何らかの記号 (signe) と見なさない限り、それが何かを「意味している」と言うことはできない。それが意味を持つのは幼児が広い意味での「言葉 (langage)」の世界に入ったことを意味するであろう。ここにおいて他者に向かって発せられた記号化されたもの、それが「要求 (demande)」となろう。こうした「象徴的指示対象の中に幼児を記入する他者 (autre)^⑧」, 「それ自体で、幼児に対して特権的な他者^⑨」, こうした「他者」がラカンの唱える「他者A」なのであるとドールは見なす。この時期の幼児においてはその「他者A」は母親となり、この点においては後に検討するナシオの理論と共通している。ドールはフロイトの言う、「欲動の動きによって再備給された記憶イメージ ((訳者) 他者によって満足を与えてもらった知覚の記憶イメージ) は、これ以後は他者Aのシニフィアン^⑩の網で包まれた体験へと流れ込むこととなる」と説明している。彼によれば、この幼児における「身体的現れ (manifestations corporelles)」がシニフィアンとして表されたもの、つまり、「広い意味でのことば (「泣き声」も含まれる)」として表されたものが「要求」である。

しかし、ラカン自身は「欲望は欲求から要求が引き裂かれた余白に現れる」(E814)と書いており、ドールのように「要求が何よりも欲望の表現であるとしたら^⑪」と仮定できるかどうかは不確かである。

さて、ではこうした幼児が言語を自由に操れる年令に成長した時、「人の欲望は他者Aの欲望である」というラカンの公式が成り立つとたなら、その「他者A」はどのような存在を指すのであろうか。一つは既に確認したが、ジラルの理論における「他人の欲望」ということが考えられる。ここで明らかにしたいのは、ラカンの「他者A」と日常的な意味における「他人」との差異である。

実はラカンも初期においては「欲望」を単なる「他人」との関係で捉えていた時期がある。1946年に発表された論文では、以下のように説明されている。

人間の欲望でさえ、媒介の記号の下で構成される。自分の欲望を認めさせることが欲望であると彼 (ヘーゲル) は我々に言っている。人間は何

4 (番場)

らかの媒介なしに自分の欲望として構成される対象を持たないという意味において、人は対象として、ある欲望、他人 (autrui) の欲望を持っている。(()内は訳者) (E181)

ここでは「他人 (autrui) の欲望」と示されているが、1953年9月の「ローマ講演」では、次のように少し変えられて出てくる。

要するに、人間の欲望はその意味を他者 (autre) の欲望の中に見出すということは、いかなる場所にもこれ以上明確には現れていない。それは、他者が欲望された対象の鍵を握っているからというより、むしろ人間の欲望の最初の対象は他者に認められるということであるからである。
(E268)

この講演の中では、「他者 (Autre)」という語が既に使われているにもかかわらず、「他者Aの欲望」という用語は使われていない。ここにおいても「人間の欲望」を「他者 (他人) の承認を求める欲望」と見なす考え方は変わっていない。年代と共に変貌していく、ラカンの「欲望」に対する概念の変化を大雑把に捉えれば、「他人 (autrui) の欲望」→「他者 (autre) の欲望」→「他者Aの欲望」という変化を認めることができる。

ラカンの思想の歩みにおいて、この「他人」がいつ「他者A」に変わったのかは、未刊の『セミネール』が多い現在、確定することはできないが、この章において後に検討する論文によれば、1958年7月には既に「他者Aの欲望」という概念が出ている。更に、「転移」と「愛」との関係について論じた1962年3月1日のセミネールではこの「他者A」は「パロールの場」、主体としてあるいは道徳的な我々と同等な存在として尊重されるような他者 (autre) ではないもの、「場として必要とされると同時に必然的なもの」と定義されている。(S8-202) つまり、我々と同等の別の主体としての人間をさしているのではなく、パロールが成立する「場」、言葉がつむぎ出されてくる「場」として定義されていることに注目しなければならない。1960年9月に発表され、『エクリ』に収められている論文では「シニフィアンの宝庫の場 (le lieu du trésor du signifiant)」(E806)と定義されている。そしてそれに先立つ1958年7月に発表された論文「治療の指導とその能力の諸原則」

では以下のように説明されている。

もし欲望が実際に、主体の欲求をシニフィアンの連続箇所 (défilés du signifiant) を通過させるよう主体に課されているこの条件の主体にあるとしたなら、そして他方 (・・・) パロールの展開する場としての、大文字のAを伴った他者Aの概念を確立しなければならないとするなら、欲望は他者Aの欲望であると主張しなければならない。(E 628)

ここで明らかにされているのは、動物としての側面も持つ人間の、生理的なものに属する「欲求 (besoin)」から「欲望 (désir)」が生まれてくる様である。ここでは「要求 (demande)」という語は使われてはいないが、主体の意識が「欲求」につき動かされて「シニフィアンの宝庫、連続箇所」としての「他者A」の場を通る時、それをラング (Hermann Lang) は「自分の欲求をシニフィアンによって織り直さなければならない^⑫」と言い換えているが、その時、発せられたシニフィアンの連なりを「要求」と名づけるなら、そこからのずれという形で「欲望」が現れるということなのであろうか。この様に考えれば、何らかの「欠如感」を「私は・・・が欲しい」と表現した時、その表現からのずれという形で「欲望」が生じるということになる。こうした見方をする時、「他者Aの欲望」とは「他者Aが欲望すること」であり、すなわち、「言語が欲望すること」であるとまで言い切るラングの見方も理解できる。

しかし、注意しなければならないのは、その場合の「言語」とは、主体によって意識的に選び取られ生み出された言語ではなく、無意識的に主体の内でも生成した言語であるという点である。文学の批評用語に「テキスト相互関連性 (intertextualité)^⑬」というものがある。その概念によれば、全てのテキストは他のテキストの変形されたものや吸収されたものが入り交じったものとされ、それが主体によって意識的になされた場合には「パロディ」や「引用」と確認できるが、そうでなくても無意識的に他のテキストの言葉が紛れ込んである場合も考えられる。従ってあるテキストに顕在した言葉は、そのテキストの言葉、つまりそのテキストの作者の言葉であると同時に別のテキストの言葉であるとも考えざるを得なくなる。この考え方における「テキスト」なり、「言葉」なりを「欲望」という言葉に置き換えれば、「他者Aの欲

望」という概念も理解し易いものとなるのではないであろうか。

ラカンは「欲望のグラフ」において、「他者A」の場であるAから矢印を伸ばし、そこに *Che vuoi?* と記している。その *Che vuoi?* とはカゾット (Jacques Cazot) の小説の中で、主人公が呪文を唱えると現れる時に悪魔が言う言葉で、*Que veux-tu?* (なんじは何を欲するのか?) という意味だと説明した後、ラカンはさらにその言葉は「本当になんじの意志である欲望はあるのか?」(S8-167) という意味だと言い換えている。

このことを第5章の夢の分析で具体的に検討する前に、ではその「欲望」の原因であり、「欲望」の対象であるとされる「対象a」とは何かということを次の章で検討しよう。

4 対象a

『セミネール第8巻』でプラトンの『饗宴』を扱っている箇所がある。その中でアルキビアデスがソクラテスの中にあると想定したアガルマ (agalma, ἄγαλμα, 「装飾」という意味) は古代人にとっては「その周りで神の配慮をつかみ取ることができるような何か」(S8-171)なのであったが、ラカンは「乳房」や「男根 (phallus)」や「糞便」と同じく「部分対象 (objet partiel)」である、「欲望の対象」を、そのアガルマの頭文字を取って「対象a (objet petit a)」と名づけた。(S8-176) (S8-190)

この「欲望の対象」であると同時に「欲望の原因」でもある「失われた対象」としての「対象a」は、ドールによれば、「永久に欠如しているという意味でいかなる対象を嵌め込むこともできる^⑧穴」なのである。

しかし、これらの説明ではあまりに抽象的で具体性に欠けている。ナシオ (J.D. Nasio) はあくまで具体的な臨床の立場に立ち、自分なりにこのラカンの「対象a」の説明と理論的發展を試みている。まず、ナシオの説明を支えとしながら、この「対象a」に迫ってみたい。

それにしてもラカンは何故この「対象a」という概念を用いたのであるか。それは「対象」でありながら「穴 (trou)」と言い換えられるような存在であった。欲望とは何よりも「欠如」であり、その「欠如」を何かで表そうとするなら「穴」となるのは必然的とも言える。その「何もない」ものが主体の無意識に働きかけ、主体を動かしているさまを構造的に捉えようとするとき、それは「対象」とならざるをえず、それを「対象a」と呼ぶのは理論

的には十分理解できる。ナシオは「構造 (structure)」とは呼ばず、シニフィアンの「体系 (système)」という語を用いているが、彼は「対象 a」を「シニフィアンの形相的体系によって生じた過剰としての異質なもの (hétérogène)^⑮」と定義している。しかし、なぜ「穴」がそう定義されるのであろう。肝心なのは「穴」という言葉から普通連想されるような、静的な「形」としてそれを捉えるのではなく、動的な「吸い込む」機能を持った存在と捉えることをナシオは提案する。

その穴はまず第一に、体系を動かす引きつける極である (原因)。この穴の力は享樂と名づけられる (剰余享樂 (plus-de-jour))。最後に、その享樂はるつばの中心におけるエネルギーの渦巻きであるというよりはむしろ、その穴の縁を走っている恒常的な流れである^⑯。

この様な見方がナシオ自ら名づける「形相的視点」だとしたなら、今度は「肉体的次元」で具体的なものとして考察することをナシオは試みる。「対象 a」を「穴」と言っても我々が日常的に想像するような円で縁取られた穴ではなく、収縮したり、膨張したりしてつかの間の「穴 (creux)」をつくり出すような「享樂のエネルギー」の流れの満ちている「縁 (bord)」とナシオは定義しなおす。彼によれば、「対象 a」には物質的、器官的という意味ではなく、「幻想 (fantasme)」として肉体から「分離しうる部分 (partie détachée)」という性質がある。ラカン自身は「性感帯」と関係した、「対象 a」と想定される諸対象の具体例を「乳首、排泄物、男根 (想像の対象)、尿の流れ。(このリストには、音素、眼差し、声-無、といったものを加えないということは考えられない。)」(E817)と説明している。肉体から分離しうるものが全て「対象 a」になるのではなく、想像的な条件の一つと象徴的な条件を二つ満たすことでその対象になるとナシオは主張する。それらは具体的には「突出している形」ととっているという想像的な条件や、「体において別離 (séparation) に運命づけられている場所」であるという象徴的条件を満たすものである^⑰。

もう一つの象徴的条件は、「パロール (ことば (parole))」を通してのみその対象の肉体からの分離が行われるということである。幼児にとって母親の肉体から乳房を引き離し自分のものにしたり、それを自分の口から引き離

すのは、最初のパロールとしての「泣き声 (cri)」である。その「泣き声」は幼児である「主体」から母親である「他者 (A)」への「要求 (demande)」であるだけでなく、自らの乳を飲むようにという母親である「他者A」から「主体」への「要求」でもある、とナシオは独自の解釈をする²⁰。しかし、「要求」はパロールであるため、その求めているものと「要求」として言表したものとの間には、根本的な「不一致 (inadéquation)」が考えられる。例えば、幼児が飢えて泣いていたとしても母親は、幼児が寒さから泣いているのだと思うかもしれないとナシオは説明する。パロールによって行われる「要求」はそれが狙っている現実の「対象 (物)」を「精神の抽象作用」すなわち「幻覚としてのイメージ (image halluciné)」に変えてしまう。このイメージこそ「欲望の対象」や「対象 a」と呼ばれるものなのである。

このように、要求された乳房は、——パロールの媒介手段により、——欲望の幻想としての乳房 (sein halluciné du désir) となるのである²¹。

こう説明するナシオが展開する独自の見解によれば、幼児のこの「欲望の乳房」は自分の乳房を子に与えたいという母の「エロチックな欲望の乳房」でもある。言い換えればこの場合、乳房は母親の肉体の器官ではなくて、子のパロール行為により、象徴的に分離され、失われた乳房なのである²²。従って、乳を飲み終え、「欲求 (besoin)」の次元では全く満たされ、眠り込んだとしても、尚、「欲望」の次元では乳房を望んでいる幼児を考えることも可能となる。しかし、ナシオはここで一見奇妙に思われる定義を提示する。

しかし、厳密に言えば、根本的には対象 a は幻覚としての乳房ではない。それはエネルギー、定義できない剰余享樂 (plus-de-jouir)、あるいは乳房の幻覚に捉えられた見かけ (semblant) によって包み隠された穴 (trou) である²³。

ここにおいて「厳密に言えば」、「根本的には」という言葉で論理的矛盾を消そうというナシオの苦渋が伺えるが、ここで彼が言おうとしていることは、「主体」が何かを欲望するときにはその対象を、肉体のある器官なり、他の

部分なり、「実体」として捉えるが、「対象 a」の本質はあくまで「穴」として考えられる空虚だということだと思われる。人の発達段階において具体的な対象として考える場合と抽象的な理論として考える場合の整合性の問題がここに現れている。

この幼児における「欲求」と「欲望」との現れを更に分かりやすくしている現象に「無食欲 (anorexie)」がある。これは「欲求」の次元では満足しており、お腹はすいていないのに、「欲望」の次元では満足しておらず、言わば「欲望としての食欲 (appétit du désir)」を持っている状態である。それは幼児のみならず、その若い母親にも当てはまるとナシオは指摘する。母親は「欲望」が満たされないのであれば、同様にお腹も満たされないことで心の平安を得ようとする。それが「無食欲」として現れるのだ。ナシオは無食欲者の無意識を次のように推測する。

いいえ、私は満足しないために食べたくありません。そして私は私の欲望が、——そして単にわたしの欲望ではなく、母の欲望もまた、手つかずのままであることを確信しているために満足したくありません。²⁴

ここで改めて問題となるのは、今度は「要求」と「欲望」との差異もしくは関係である。ナシオの分類に従えば、「要求」は「現実の対象 (objet réel)」を狙ってそれが得られないために不満足になるが、「欲望」は「不可能な目的」つまり、「近親相姦」を狙うがゆえに、それが得られなくて不満足に陥る。もう一つの差異は、「要求はその対象を欠き、失望するに留まるが、欲望は近親相姦を欠くがその代理物、幻想としての対象を見つける²⁵」という点である。この代理物は「幻想 (fantasme)」の下に現れる。もし幼児が「欲求」に従い、食べることを「要求」したとする。その場合、その幼児が食べたとしてもそうでないとしても、自分の「要求」が裏切られたことを知り、「欲望の対象」を幻想として抱く。これが、「要求のかなたで、小さな存在は欲望する²⁶」ということの意味である。

母親の乳房はこのように幼児にとって「欲求」、つまり飢えを満たす対象ではなくなるが、それを「要求」の対象にしているのは、母親の「授乳したい」という「欲望」である。ナシオは「対象 a」はこの「主体 (幼児)」と「他者 A」との間（「集合」の比喩を使えば「共通集合」）から「落ちる」と

いう表現で説明する²⁷⁾。こう考えれば「人の欲望は他者Aの欲望である」というラカンのテーゼは説明の必要なくそのまま受け入れられることになる。

子が持つとされる近親相姦の欲望は、母親の肉体を全的に所有したいと望むことだとナシオは断言する。現実にはそれは不可能で、母親の一部を所有するのに留まり、しかもそれは頭の中で「幻想 (hallusination)」として、つまり「心的な産物」として所有するにすぎないのであり、その「心的な産物」をナシオは「幻想 (fantasme)」と呼ぶ²⁸⁾。

このように、人の幼児期での「他者A」としての母親と子との関係における「対象a」はかなり、明確になっているものの、大人における「対象a」が「他者A」との関係でどのように機能し、「他者Aの欲望」が成立するのかという点については語られていない。我々はそれを次の章で試みたい。

5 「肉屋の妻の夢」を巡って

「他者の欲望」という問題を考えるうえで好都合な、フロイト (S. Freud) の行ったある夢の分析がある。それはフロイトの示した「夢の隠された意味は願望充足である」という見解に反論する形で一人の女性患者から話された夢である。それはこういう夢であった。

ひとを夕御飯にお招きしようと思った。しかし燻製の鮭が少々あるほかには、何の貯えもなかった。買物に出かけようと思ったら、今日は日曜の、しかも午後なので、お店はどこも締まっているということを思い出した。そこで出前で届けてくれるところを二、三軒電話であたってみようとしたけれども、電話は故障している。それでその日ひとを御招待しようというわたしの願いは諦めてしまわねばならなかった²⁹⁾。

この女性患者は肉屋の妻であり、フロイトは彼女の見た夢の話から夢の背景にある彼女の実生活と夢との関係を探ってゆく。その結果以下のことが明らかになる。最近自分が肥ってきたことを気にする夫は、「よそから夕御飯によばれても絶対にでかけてはいくまいと話した³⁰⁾」こと。この夫にすっかり惚れているその女性患者は、食べたいと思っているにもかかわらず、贅沢だということで控えているキャビアを、「自分にくれないように」と夫に頼んだことがあり、それは夫をからかうためだと彼女自身は答えたこと。またそ

の夢の前日、その女性患者はある女友達を訪問したが、その女性患者の夫がその女友達のことをいつも誉めそやしているため、彼女に対し少しやきもちを焼いていたこと。豊満な女性を好む彼女の夫の好みとは反対に、その女友達はひどく痩せていた。その女友達はもっと肥りたいと話していたことがあり、その女性患者に夕御飯に招待してくれるよう頼んでいたのがあった。

これらの証言や自分で調査した結果から、その女友達の体つきがふっくらとし、自分の夫にもっと気に入られることを恐れて、夕御飯には招待したくないという女性患者の無意識的願望が、夢から読み取れるとフロイトは言う。しかも彼は、女性患者の夢にも出てきた「鮭の燻製」をその女友達が大好きであるにもかかわらず、それにお金を使いたがらないということも確かめることができた。

以上のことからフロイトは、この女性患者は「ヒステリー性同一化」と呼ばれる形で彼女の女友達と同一化していると指摘する。フロイトのこうした分析を受けてのラカンの分析は、この同一化を巡って大きく転回している。

それは、ここで主体は何になるのかという問いである。そこにおいて、その女性は男性に同一化し、鮭の燻製は他者Aの欲望の場にやってくる。

この欲望は何に対しても十分ではないので（この鮭の燻製の切れはしでどうして皆を迎えることができようか？）、あげくのはてに（そして夢の終わりに）夕食をもてなしたいという私の欲望を（あるいは他者Aの欲望、それは私の欲望の秘密であるが、それを私が探究することを）断念しなければならないのである。(E 626)

常に自己の臨床場面を引き合いに出すことなく、抽象的論理に終始するかと思われるラカンの「他者A」や「他者Aの欲望」を具体的にどう考えたらよいかの糸口がここに伺える。ここでは「人に夕食をもてなしたい」というのが、「私」の欲望でありそれが同時に「他者Aの欲望」であるというように使われている。ラカンがここにおいて大きく転回していると思われるのは、この女性患者が同一化しているのは、フロイトの見解とは異なり、「男性」だと主張している点である。ラカンがそう考える根拠はその鮭の燻製は「ファルス^①」を表しており、「ファルスであること、それが少し痩せたファルスであるとしても、それは欲望のシニフィアンへの究極的な同一化ではない

か？」(E 627)と主張する。

なぜこのような転回が行われたのかを考えてみよう。ラカンが「欲望」を構造的に捉えようとするとき、何よりも重点を置いたのは「換喩 (métonymie)」という考え方である。これは修辞学の用語としては例えば「意味の隣接による名称の転移」^②というような表現方法を指す。ラカンは先に挙げた夢の分析をこの「換喩」という語を使って次のように説明する。

さしあたって次のことを確認しておこう。欲望が不満足なものとして意味されるとしたなら、それはシニフィアンすなわちシニフィアンがそれを接近不可能なものとして象徴化している限りにおけるキャビアによって意味されている。しかし、欲望が欲望としてキャビアの中に滑り込むやいなや、キャビアへの欲望は、欲望がそこに留まっている存在欠如によって必要となったその換喩となる。(E 622)

そしてラカンは「この見かけ (apparence) の真実は欲望とは存在欠如の換喩であるということである」(E 623)と断言する。さらにラカンは「自我」についても「自我は欲望の換喩である」と定義している。(E 640)

人間の欲望が他者Aの欲望であり、欲望とは存在欠如の換喩であり、自我が欲望の換喩であるとしたなら、自我とは他者Aの欲望を探ってゆけば到達できるということになるであろうか。「肉屋の妻の夢」を以上の考え方で辿ってみよう。女性患者は夫に対して何らかの性的に満たされない欲望を抱いていたことがまず予想される。彼女の女友達に対して夫が好感を抱いたことからその女性患者は、夫に対する関係で自分の女友達と自分が同じ位置にいると無意識のうちに感じ、その女友達と同一化する。そのため、自分の欲望の換喩であるキャビアと女友達の欲望の換喩である鮭の燻製が入れ替わったのである。

先に引用したラカン自身の分析とこうした分析を照合すると幾つかの矛盾あるいは曖昧さがあることに気づく。まず問題の女性患者が夢において同一化しているのは「女友達」なのか「男性」なのかという点であり、次にこの夢における「他者Aの欲望」とは何なのかという点である。まず後者から考えると、既に紹介したようにラカン自身はまず、「人に夕食をもてなしたい」という夢の中での気持ちを「他者Aの欲望」と説明しているが、それは「夕

食をもてなしてもらいたい」,あるいは「もっと肥りたい」という女友達の欲望の現れと考えるべきなのであろうか。フロイトが見抜いたように、その女友達が肥って自分の夫により気に入られることのないように、というその女性の願いが換喩としての欲望なのだろうか。

それ以上に不思議なのは「わたしにキャビアをくれないように」という女性患者が実生活で彼女の夫に言った言葉である。フロイト自身は、夫に気に入られている女友達に同一化するためなのだと結論づけている。つまり、その女友達は鮭の燻製が大好きなのにそれにお金を出したがるらないので、自分もキャビアを食べられないという「実現のかなわない願望³³」をつくり出したのである。しかし、欲望には本来、その対象を追い求める働きと同時に、最終的にその対象を手に入れることを恐れる、もしくは禁じるようなものがあるのではないであろうか?そうした欲望のもう一つの姿を芥川の『芋粥』に見ることができるのである。

6 欲望の対象の曖昧さ——芥川作品に見られる欲望——

さて、ここでいままで考察してきたラカンの理論を具体的な例で検討することはできないであろうかと捜すと、臨床の場に身を置かない者でも考えることのできる例が見つかる。芥川龍之助の二つの短編を例にとろう。性的な欲望をテーマにしたものとして『好色』を、次に、一見誤解されやすい「食欲」をテーマにしたものとして『芋粥』を欲望の見地から検討したい。

①『好色』

これは「平中」と呼ばれているドン・ファンが「侍従」に恋をしてしまうところから始まる。平中にとって意外なことに、彼の熱心な働きかけにも侍従は心を動かされず、それがますます平中の思いを募らせることになる。それが進行し、「しかしいくら思い切っても侍従の姿は幻のように、必ず眼前に浮かんで来る³⁴」までに至り、「もしこの姿が何時までも、おれの心を立ち去らなければ、おれはきっと焦れ死に、死んでしまうに相違ない³⁵」と思う。何とかして侍従の姿を忘れようとして平中が思いついたことは、その侍従の不浄を見ようとするのであった。そう思ったとき偶然に侍従の局の女の童が、篋を運んで来るのを見つける。侍従のした糞がそこに入っていると確信した平中はそれを童からひったくる。逡巡した後、やっとのことで篋の蓋をとった平中の鼻を打ったのは丁子の匂いであった。その匂いのあまりの良さ

に、^{こういろ}香色の水を啜り、糞の色、形をしているものを噛み締めてみる。結局それは、平中の企みを破るために侍従が作った香細工の糞であった。そして平中は瀕死の意識で倒れる。

中心となる物体は筋の展開においては、思わずそこに口をつけてしまうことが自然に思われる「丁子を煮返した上澄みの汁」とそこに沈んだ「香木」なのであって、本物の「尿」と「糞」ではないように書かれている。しかし、これこそラカンの言う「対象a」であり、ナシオに倣ってより正確に言えば、「対象a」の衣を纏った欲望の対象なのである。芥川の才能により、その「尿」や「糞」は美しく形象化されているが、欲望が換喩として現れていく過程を見事に描き出している。芥川自身がどの程度意識的であったのか不明であるが、性的欲望を直接表す「好色」というこの短編の題は、欲望がシニフィアンの連鎖の果てにゆきついた「香色」へと繋がっているのである。

②『芋粥』

これは「某の五位」と、固有名さえ示されないみじめな境遇の男が主人公である。彼は5、6年前から年に一度「僅に喉を^{わずかのど}沾^{うるお}すに足る程の少量」しか口にすることができない。「そこで芋粥を飽きる程飲んで見たいと云う事が、久しい前から、彼の唯一の欲望になっていた。(・・・)いや彼自身さえ、それが、彼の一生を貫いている欲望だとは、明白に意識しなかった事であろう。が事実、彼がその為に、生きてると云っても、差支ない程であった」と書かれている。それがひょんなことで芋粥を飽きる程食することができる機会に直面したとき、主人公は、不安になり、そんな幸運がそう早く来てはならないと思う。「どうもこう容易に「芋粥に飽かむ」事が、事実となって現れては、折角今まで、何年となく、辛抱して待っていたのが、如何にも、無駄な骨折のように、^{②6}見えてしまう」と思い、なみなみと一斗ばかり入れ物につがれた芋粥を見て、口をつける前から既に満腹を感じる。実際にはつがれた芋粥を「いやいやながら飲み干し」てしまう。五位は心の中で「遠慮のない所を云えば、始めから芋粥は一椀も吸いたくない^{②7}」と思うのだ。

偶然現れた野狐に芋粥を与えることになり、それを飲んでいる狐を見ながら、そこに来て芋粥を与えられる前の「憐れむ可き、孤独な」自分を懐かしむ。その五位を語り手は、「しかし、同時に又、芋粥に飽きたいと云う欲望を、唯一人大事に守っていた、幸福な彼である^{②8}」と説明する。ここで対比させられているのは、語り手自身が言っているように、「芋粥を飽きる程飲ん

でみたい」という欲望を抱いていたときの五位とそれが完全に消え去った五位とであるが、同時に、芋粥を飲む野狐を対比させていることにも気づかねばならない。狐が芋粥を食べるのは空腹につき動かされて食べるのであり、たとえそれが「好み」の食物をであったとしても、生理的「欲求」によって食べていることに変わりはない。つまり、ここでは「欲求」に対比させられることにより、「欲望」の不思議さが際立たせられているのである。

ここでもう一度注目したいのは、食べ飽きたのではなく、食べる前に既に欲望は消え失せ、満たされぬ欲望を抱いていたときの自分を「欲望を唯一人大事に守っていた幸福な彼」と思っていることである。言い換えれば、ここにおいては「欲望を抱いている自分を欲望している」とも言えるのである。更にここで、フロイトとラカンが分析した「肉屋の妻の夢」を再び考えてみよう。その夢をみた女性患者は常日頃、夫に対し大好きなキャビアを自分に「くれないように」頼んでいた。その女性の欲望に対し、決定的な解釈は提示できなかったが、「欲望」には「ある欲望の実現の遅延を願う欲望」もあることを認めないわけにはいかない。

「他者の欲望」とは主体の無意識において換喩として働き、主体の意識においては「自分の欲望」として感じられるものであった。

この短編の主人公に固有名をつけずにただ五位としたのは「恐らくは、実際、伝わる資格がない程、平凡な男だったのである^⑩」と語り手は推測するが、それは同時にこの主人公により一層普遍性を与えることに成功している。ラカンによれば、シニフィアン連鎖によって果てしない横滑りを繰り返す主体が、それを止めるのは「対象 a」を主体が欲望した時であった。(S 8-202)主人公の五位は、芋粥を欲望する主体として自らを存在せしめていたのだ。それ故、その「芋粥」が欠如の対象でなくなり、「欲望の対象」でなくなった時、自己の存在理由を失ってしまったのだ。

7 結び

以上のように考察してくると先に引用した「ほしいものが、ほしいわ」という宣伝のコピーは欲望の本質を極めて正確に表していたのだということを思い知らされる。自分の欲望を明確に意識しているつもり主体（「具体的なあるものが欲しい」）にとって、実はそれは「他者の欲望」である、という意味だけではなく、欲望の対象そのものが分からなくなっている人間の悲

鳴 (*Che vuoi?*) ともとれるのではないであろうか。ラカンの幻想のマテーム (数式や記号で表したものを) $\text{S} \diamond \overset{\text{⑭}}{\text{a}}$ は「対象 a」と一体化しているという幻想にとりつかれた主体を表しているともとれるし、どんなに求めても \diamond により、永久にその求める「対象 a」からは隔てられている主体という幻想の真実を表しているともとれる。この様に「他者の欲望」によって欲望せざるを得ないのが人間なのである。

(1995年3月)

注

本稿においては、ラカンのテキストは以下の二冊を使用する。

・ *Écrits*, Seuil, paris, 1966. (本稿において頁数を示す時は E と略す。)

・ *Le Séminaire livre VIII Le transfert*, Seuil, 1991. (本稿において頁数を示す時は S8 と略す。)

① 1988年 糸井重里制作 西武デパートの宣伝コピー。

② René Girard, *Mensonge romantique et Vérité romanesque*, Editions Bernard Grasset, Paris, 1961. 本稿では Livre de poche 版を使用。(古田幸男訳, 『欲望の現象学——ロマンティックの虚偽とロマネスクの真実——』, 法政大学出版局, 1971年。)

③ *Ibid.*, p.17. 訳, 3頁。

④ *Ibid.* 訳, 同上。

⑤ *Ibid.*, p.16. 訳, 2頁。

⑥ *Ibid.*, p.18. 訳, 4頁。

⑦ *Ibid.*, p.19. 訳, 5頁。

⑧ Joël Dor, *Introduction à la lecture de Lacan*, Denoël, 1985. p.186. (小出浩之訳, 『ラカン読解入門』, 岩波書店, 1989年。164頁。尚, 本稿ではこの著作の訳文の一部を変えさせて戴いた。)

⑨ *Ibid.* 訳, 同上。

⑩ *Ibid.* p.187. 訳, 164頁。

⑪ *Ibid.* p.188. 訳, 165頁。

⑫ H. ラング著, 石田浩之訳, 『言語と無意識——ジャック・ラカンの精神分析』, 誠信書房, 1983年。210頁。但し「能記」は「シニフィアン」と換えさせて戴いた。

⑬ 同書, 213頁。

⑭ 1966年にクリステヴァ (Julia Kristeva) によって提示された概念。(cf. Le mot, le dialogue et le roman, in *Séméiotikè Recherche pour une sémanalyse*, Seuil,

1969. (「語、対話、小説」, 中沢他訳, 『記号の生成論1』, セリカ書房, 1984年, に所収。)
- ⑮ Dor, *op. cit.*, p.185. 訳, 162頁。
- ⑯ J.-D. Nasio, *Cinq leçons sur la théorie de Jacques Lacan*, Editions Rivages, 1992. p.129. (姉齒一彦+榎本譲+山崎冬太訳, 『ラカン理論5つのレッスン』, 三元社, 1995年。本稿執筆の段階においては, 時間の関係で訳語の参照はできなかった。)
- ⑰ *Ibid.*, p.130.
- ⑱ *Ibid.*, p.132.
- ⑲ *Ibid.*, pp.135-137.
- ⑳ *Ibid.*, p.139.
- ㉑ *Ibid.*
- ㉒ *Ibid.*, p.140.
- ㉓ *Ibid.*, p.141.
- ㉔ *Ibid.*, p.143.
- ㉕ *Ibid.*, p.147.
- ㉖ *Ibid.*
- ㉗ *Ibid.*, p.144.
- ㉘ *Ibid.*, p.149.
- ㉙ 高橋義孝訳, 『フロイト著作集2』, 人文書院, 1975年版。125頁。
- ㉚ 同上。
- ㉛ ファルス (phallus) とは, 解剖学的な器官としての「男根」をさすのではなく, 構造の中でのシニフィアンとして捉えられた欲望の対象の一つである。ラカンがここで「鮭の薫製」をファルスと言っているのは, それが欲望の対象であると同時に形の類推を可能にするためと思われる。
- ㉜ グループμ著, 佐々木健一, 樋口桂子訳, 『一般修辞学』, 大修館書店, 1981年。231頁。
- ㉝ フロイト, 前掲書。128頁。
- ㉞ 芥川龍之介, 『羅生門・鼻』, 新潮文庫, 1994年版に収録されているものを使用。172頁。
- ㉟ 同上。
- ㊱ 同書。37頁。
- ㊲ 同書。52頁。
- ㊳ 同書。54頁。
- ㊴ 同書。55頁。
- ㊵ 同書。32頁。
- ㊶ ラカン自身はこれを「欲望の対象を前にして消え去った主体」(E634)。「抹消

された主体(と) aの欲望」(S8-370)と読むよう示唆している。

参考文献

- ・石田浩之著、『負のラカン——精神分析と能記の存在論——』, 誠信書房, 1992年。
- ・Jeans-Louis Henrion, *La Cause du désir——l'agalma de Platon à Lacan——*, Point Hors Ligne, 1993.

(本学専任講師, フランス語)